



# 初めて「極めて高い」と断定 温暖化の原因は人間活動と

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 **平野 喬**

「地球の気温が温暖化していることは疑う余地がない」「人間活動が20世紀半ば以降に観測された温暖化の主な要因であった可能性が極めて高い」。

世界の多くの科学者がこのような表現で地球の温暖化を指摘し、人間活動の見直しを求めています。私たちはそれでもなお、「最近、地球の温暖化は治まっている」「地球の温暖化は人間活動が主な原因ではなく、自然現象」などと言っていることが許されるのでしょうか。

地球の温暖化に対して「懐疑派」と呼ばれる人たちが存在し、テレビや新聞、雑誌などで声高に「温暖化論者」を批判しています。「科学論争」と言うほど内容のある批判には思えません。そのような声が、国民の意識をあいまいにし、政治の決断を遅らせ、国家間の協力の足並みを不揃いに行っていることは否めません。

去る9月、スウェーデンで開かれた「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)は、1988年の発足以来5回目となる報告書を発表しました。IPCCは世界気象機関と国連環境計画が設立した国連の機関で、気候変動問題に関する最も権威のある組織です。2千人とも言われる世界の科学者、研究者が、世界で発表された気候変動問題に関する論文を収集して、内容の信頼性を検証し、それを評価した報告書としてまとめ、政策決定者に提供します。ここで得られた科学的知見は国際交渉のたたき台にもなり

ます。

今回発表されたのは、気候変動の科学的根拠についての報告書です。この中で、人間の活動が温暖化を引き起こしている可能性が「きわめて高い」という表現が初めて使われました。IPCCによると「きわめて高い」というのは、95%~100%の可能性がある事柄に使われる言葉だと定義されています。ちなみに、6年前の第4次報告書では、この部分は「可能性がかなり高い」と表現されていました。これは90%~95%の可能性とされていました。

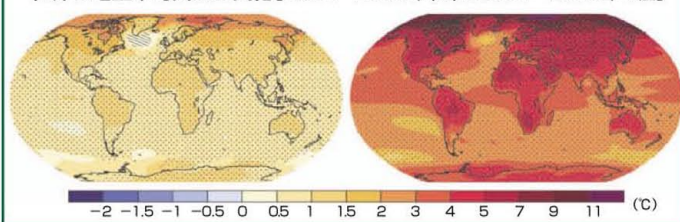
## 国民の関心は著しく低下

将来起こるだろう現象に対して、科学者・研究者は最も慎重に発言する人たちでしょう。預言者ではありませんから、科学的に100%の証明ができない限り、将来予測には厳密に言葉を選んで表現します。そんな人たちの集まりであるIPCCが「温暖化は疑う余地がない」と断定し、人間の関わりについても「可能性が極めて高い」と言いきったことに、私は科学者たちの並々ならぬ決意を感じてしまいました。

前回、この欄で取り上げた気候変動問題についての「コンセンサス・ギャップ」は、科学者の抱く危機感と一般の人たちの間に大きな隔たりがあるという事実でした。リーマンショックによる世界的不況、日本では東日本大震災以降、気

(環境省資料より)

世界の地上平均気温の変化[1986~2005年(左)と2081~2100年の差]



候変動問題に対する政府、国民の関心は著しく低下してしまいました。

報告書は、3000m以上の深海でも水温が上昇、海面水位の上昇率が上がっている、などの新見解を明らかにするとともに、世界的に極端な高温の頻度が増加すること、十分な対策を取らないと、世界の平均地上

気温は2081年~2100年にかけて1986年~2005年の平均に比べ2.6~4.8度上がる可能性が高いことなどを報告しています。

来年3月には、横浜市でIPCCの総会が開かれます。ここでは、人為起源の温暖化が避けられない中、どのような適応策を取ったらいいか、世界が注目する報告書が発表されます。科学者の警鐘に真摯に耳を傾けたいと思います。

一般財団法人 地球・人間環境フォーラム  
環境問題に取り組む公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。  
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。